

タキトウス帝

はじめに

- タキトゥス帝：軍の依頼を受け、元老院の決議による

はじめに

- タキトゥス帝：軍の依頼を受け、元老院の決議による
- ↓
- 例外

はじめに

- タキトゥス帝：軍の依頼を受け、元老院の決議による
- ↓
- 例外
- 著者の見解：アウレリアヌス帝の暗殺が軍の意思ではなかった為

問題点

- これまでの皇帝暗殺が軍の総意という証拠はない

問題点

- これまでの皇帝暗殺が軍の総意という証拠はない
- アウレリアヌス暗殺が例外ならタキトゥス即位も例外となる

アウレリアヌス

270-275

275年のタイムテーブル

- 275秋 アウレリアヌス帝暗殺

275年のタイムテーブル

- 275秋 アウレリアヌス帝暗殺
- 軍から元老院へ新帝選出の依頼

275年のタイムテーブル

- 275秋 アウレリアヌス帝暗殺
- 軍から元老院へ新帝選出の依頼
- 元老院、軍の要請を拒否

275年のタイムテーブル

- 275秋 アウレリアヌス帝暗殺
- 軍から元老院へ新帝選出の依頼
- 元老院、軍の要請を拒否
- 元老院、最終的に筆頭元老院議員の

タキトゥス選出

タキトウス

275-276

先行研究の扱い

- タキトウスを例外扱いするのみ

タキトゥス帝の統治

- 遠征先の小アジアで病死、或いは軍によって殺害

タキトゥス帝の統治

- 遠征先の小アジアで病死、或いは軍によって殺害
- 僅か半年の、一連の短命な軍人皇帝時代の皇帝の一人に過ぎない

課題

- 何故タキトゥスが皇帝になったのか

研究史

- これまでの研究
- ラテン語史料に基づいてきたにすぎない

研究史

- これまでの研究
- ラテン語史料に基づいてきたにすぎない
- ↓
- 元老院の反動、例外、エピソード

研究史

- これまでの研究
- ラテン語史料に基づいてきたにすぎない
- ↓
- 元老院の反動、例外、エピソード
- 当時の帝国の状況にこの出来事を当てはめようとしたに過ぎない

ロストフツェフ

- 軍隊が元老院に皇帝選出を要請(118)

ロストフツェフ

- 軍隊が元老院に皇帝選出を要請＝都市ブルジョワジーの牙城であった元老院(118)

ロストフツェフ

- 軍隊が元老院に皇帝選出を要請＝都市ブルジョワジーの牙城であった元老院の農村プロレタリアート化＝軍隊化(118)

ロストフツェフ

- 軍隊が元老院に皇帝選出を要請＝都市ブルジョワジーの牙城であった元老院の農村プロレタリアート化＝軍隊化(118)
- 元老院と軍隊が同質化していたので、皇帝選出に関して両者の意見は一致していた

サイム

- ギリシア語史料に依存

サイム

- ギリシア語史料に依存
- ラテン語史料を否定：タキトゥスの元老院選出を記す

サイム

- ギリシア語史料に依存
- ラテン語史料を否定：タキトゥスの元老院選出を記す
- タキトゥスは元老院議員ではなく、ドナウ軍団の退役将軍

近年の研究

- プロソポグラフィ（家系に関する研究）

近年の研究

- プロソポグラフィ（家系に関する研究）
- 元老院構成員の本質的な変化は認められない

近年の研究

- プロソポグラフィ（家系に関する研究）
- 元老院構成員の本質的な変化は認められない
- ↓
- サイム説の検討の要

ギリシア語史料とラテン語史料

- ゾナラス(12世紀): サイムが依存

ギリシア語史料とラテン語史料

- ゾナラス(12世紀):サイムが依存
- 現在では失われている価値の高いギリシア語史料を使用

ゾナラスの記述

- 「タキトゥスがアウレリアヌスの後を継いだ。老人であった。タキトゥスは、帝位につき、75歳であったと記録されている。」

ゾナラスの記述

- 「タキトゥスがアウレリアヌスの後を継いだ。老人であった。タキトゥスは、帝位についたとき、75歳であったと記録されている。軍隊が、その場にいなかったタキトゥスを皇帝に宣言した。」

ゾナラスの記述

- 「タキトゥスがアウレリアヌスの後を継いだ。老人であった。タキトゥスは、帝位についたとき、75歳であったと記録されている。軍隊が、その場にいなかったタキトゥスを皇帝に宣言した。というのも、その時、タキトゥスは、カンパニアに滞在していたからである。」

ゾナラスの記述

- 「タキトゥスがアウレリアヌスの後を継いだ。老人であった。タキトゥスは、帝位についたとき、75歳であったと記録されている。軍隊が、その場にいなかったタキトゥスを皇帝に宣言した。というのも、その時、タキトゥスは、カンパニアに滞在していたからである。だが、その地で、元老院議決を受け取ると、私人の服装でローマ市に入り、元老院とローマ人民の意思に従って、紫衣を纏った。」

サイムの解釈

- 「軍隊が、その場にいなかったタキトウスを皇帝に宣言した。」を論拠にタキトウスを軍隊の候補者と解釈する(119)

サイムの解釈

- 「軍隊が、その場にいなかったタキトウスを皇帝に宣言した。」を論拠にタキトウスを軍隊の候補者と解釈する(119)
- 続く「だが、その地で、元老院議決を受け取ると、私人の服装でローマ市に入り、元老院とローマ人民の意思に従って、紫衣を纏った。」を無視(中井)

サイムの解釈

- 「軍隊が、その場にいなかったタキトウスを皇帝に宣言した。」を論拠にタキトウスを軍隊の候補者と解釈する(119)
- 続く「だが、その地で、元老院議決を受け取ると、私人の服装でローマ市に入り、元老院とローマ人民の意思に従って、紫衣を纏った。」を無視(中井)
- 軍と元老院の間に複数回のやり取りはなかったことになる(120)

ギリシア語史料の問題点

- はたしてギリシア語史料は正確か：
- ギリシア語史料はタキトゥスが軍隊によって選出されたということを証言しているのか(120)

ラテン語史料 (『ヒストリア・アウグスタ』)

- ゾナラスに酷似した箇所:

HA, Tacitus, 7, 5-7.

- 「非常に多くの者がその著書の中で、タキトゥスは、皇帝に指名された時、その場に居らず、カンパニアに居たと記していることを此所で無視すべきではないだろう。

HA, Tacitus, 7, 5-7.

- このことは、実際、真実であり、私は秘密にしておくことができないのである。タキトゥスが皇帝になるべきであるという噂が広まった時、タキトゥスは引きこもり、2ヶ月の間、バイアエに居たというのであった。

HA, Tacitus, 7, 5-7.

- しかし、そこから引き出され、あたかも本当に私人であるかのように、あるいは帝権を受け拒否した者であるかのように、この（自身を皇帝に指名する）元老院議決の関与したのであった」

ギリシア語史料の問題点

- ラテン語史料に見られる、空位期間も軍と元老院のやり取りも記されていない

ギリシア語史料の問題点

- ラテン語史料に見られる、空位期間も軍と元老院のやり取りも記されていない
- クロノロジー研究から半年間の空位は考えられない←
- 275年10月まで アウレリアヌスは帝位にあった
- 276年1月 タキトゥスは二度目のコンスルに就任

ラテン語史料の信憑性

- ウィクトルが原史料を誤解した、と一般には理解されている

ラテン語史料の信憑性

- ウィクトルが原史料を誤解した、と一般には理解されている
- ウィクトルはタキトゥスとフロリアヌスの治世は、アウレリアヌスとプロブスという強力な皇帝の間に挟まれた「いわばある種の空位のようなもの」と解されたのを、アウレリアヌスとタキトゥスの間に生じた空位期と混同した(119～120)

ラテン語史料の信憑性

- 『ヒストリア・アウグスタ』のほうは、ウィクトルの誤解を、疑問書を挿入しつつ、引き写している(120)

ラテン語史料の信憑性

- 「非常に多くの者がその著書の中で、タキトゥスは、皇帝に指名された時、その場に居らず、カンパニアに居たと記していることをここで無視すべきではないだろう。」というヒストリア・アウグスタの記事はウィクトルを含む多くの著者が皇帝指名時にタキトゥスが元老院に居なかったこと、そして元老院においてタキトゥスが受諾演説をしていなかったことを記述していることを示している。

ラテン語史料の信憑性

- その上で、
- 「このことは、実際、真実であり、私は秘密にしておくことが出来ないのである。」と述べていることから、皇帝指名時に、タキトゥスが受諾演説をしたというヒストリア・アウグスタが依拠している文献が間違っていることをヒストリア・アウグスタ自身認めていることになる。

ラテン語史料の信憑性

- そこでヒストリア・アウグスタは「2ヶ月間」指名と受諾をずらせることによって問題を解決しようとしている。

ラテン語史料の信憑性

- そこでヒストリア・アウグスタは「2ヶ月間」指名と受諾をずらせることによって問題を解決しようとしている。
- 更に重要なことは、ゾナラス系の伝承をヒストリア・アウグスタが改変した時、「軍隊が、その場に居なかったタキトゥスを皇帝に宣言した」を改変する必要性を感じていなかった(121)。

ラテン語史料の信憑性

- ヒストリア・アウグスタが著わされた4世紀においては、タキトゥスが話し合いの末、選出されたという点は異論の余地がなかったのだ。
(121)

著者が再構成する事件の経過

- 1: アウレリアヌス帝殺害

著者が再構成する事件の経過

- 1: アウレリアヌス帝殺害
- 2: 軍による新帝選出の要請

著者が再構成する事件の経過

- 1: アウレリアヌス帝殺害
- 2: 軍による新帝選出の要請
- 3: 元老院での審議とタキトゥス選出

著者が再構成する事件の経過

- 1: アウレリアヌス帝殺害
- 2: 軍による新帝選出の要請
- 3: 元老院での審議とタキトゥス選出
- 4: 軍による宣言

著者が再構成する事件の経過

- 1: アウレリアヌス帝殺害
- 2: 軍による新帝選出の要請
- 3: 元老院での審議とタキトゥス選出
- 4: 軍による宣言
- 5: 元老院によるタキトゥス召喚

著者が再構成する事件の経過

- 1: アウレリアヌス帝殺害
- 2: 軍による新帝選出の要請
- 3: 元老院での審議とタキトゥス選出
- 4: 軍による宣言
- 5: 元老院によるタキトゥス召喚
- 6: タキトゥス、軍のもとに向かう

ギリシア語史料・ラテン語史料の問題点

- ゾナラスは元老院での審議と選出を省略

ギリシア語史料・ラテン語史料の問題点

- ゾナラスは元老院での審議と選出を省略
- ラテン語史料は軍の宣言からローマへの召喚までを端折っている(121)

ギリシア語史料・ラテン語史料の問題点

- ゾナラスは元老院での審議と選出を省略
- ラテン語史料は軍の宣言からローマへの召喚までを端折っている(121)
- ギリシア語史料もラテン語史料も同じ伝承に由来している(121)

元老院皇帝タキトゥス

- タキトゥスは、サイムが説いたような軍隊の候補者ではなく、元老院の候補者であった(122)

推薦を要請した軍隊とタキトゥスがいたカンパニアとの距離の問題

- 何故ビザンティウム近郊にいた軍隊が遠方のローマ近郊、というよりはカンパニアという遠隔地にいた人物を皇帝候補としてわざわざ擁立したのか？(122)

推薦を要請した軍隊とタキトウスがいたカンパニアとの距離の問題

- ローマ市に駐屯していた近衛軍が擁立したとするブレックマンやチゼックの説(122)

推薦を要請した軍隊とタキトウスがいたカンパニアとの距離の問題

- ローマ市に駐屯していた近衛軍が擁立したとするブレックマンやチゼックの説(122)
- ラテン語史料もギリシア語史料もアウレリアヌス揮下の軍隊が要請したことは確実なので、ブレックマンやチゼックの説はありえない(122)

75歳というタキトウスの年齢の問題

- 軍隊はなぜかかる高齢者を皇帝に選出したのか？(122)

75歳というタキトウスの年齢の問題

- 軍隊はなぜかかる高齢者を皇帝に選出したのか？(122)
- この点に関するサイムの説明は不十分

75歳というタキトウスの年齢の問題

- 軍隊はなぜかかる高齢者を皇帝に選出したのか？(122)
- この点に関するサイムの説明は不十分
- 元老院の関与を考えると不自然ではない

75歳というタキトウスの年齢の問題

- 軍隊はなぜかかる高齢者を皇帝に選出したのか？(122)
- この点に関するサイムの説明は不十分
- 元老院の関与を考えると不自然ではない
- 元老院の関与を考えると不自然ではない→バルビヌスが60歳、プピエヌスが74歳。(122)

75歳というタキトウスの年齢の問題

- 軍隊はなぜかかる高齢者を皇帝に選出したのか？(122)
- この点に関するサイムの説明は不十分
- 元老院の関与を考えると不自然ではない
- 元老院の関与を考えると不自然ではない→バルビヌスが60歳、プピエヌスが74歳。(122)
- 高齢者を選ぶのが元老院の「好み」(122)

75歳というタキトウスの年齢の問題

- 軍隊はなぜかかる高齢者を皇帝に選出したのか？(122)
- この点に関するサイムの説明は不十分
- 元老院の関与を考えると不自然ではない
- 元老院の関与を考えると不自然ではない→バルビヌスが60歳、プピエヌスが74歳。(122)
- 高齢者を選ぶのが元老院の「好み」(122) ←好みというよりは元老院の伝統とシステムの産物と見なすべきだろう(中井)

プロソポグラフィによる研究

- タキトゥスが元老院議員であるか否かについての議論がある(123)

プロソポグラフィによる研究

- タキトゥスが元老院議員であるか否かについての議論がある(123)
- 276年の正規のコンスルに二度目のコンスルとして就任(123)
- ゾナラスによると72歳くらいで最初のコンスルに就任

プロソポグラフィによる研究

- アウレリアヌス帝治下の273年のコンスルにタキトゥス某が就任
- このコンスルが皇帝と同一人物は否かが論争(123)

通常のコンスル就任年齢

- 元老院議員がコンスルに就任する平均年齢は、パトリキ系で30～32歳、プレプス系で40～42歳

通常のコンスル就任年齢

- 元老院議員がコンスルに就任する平均年齢は、パトリキ系で30～32歳、プレプス系で40～42歳
- 72歳で最初のコンスルに就任することは元老院議員としては考えられない

通常のコンスル就任年齢

- 元老院議員がコンスルに就任する平均年齢は、パトリキ系で30～32歳、プレプス系で40～42歳
- 72歳で最初のコンスルに就任することは元老院議員としては考えられない
- ↓
- タキトウスは騎士身分出身の元老院議員とする説が出てくる

ゾナラスに対する問題

- 273年のコンスルは皇帝とは別人



- 家名のみが記されていて、氏族名が記されていないので個人を特定できない(123～24)

騎士身分説に対する反論

- アウレリウス=ウィクトルは「コンスル格」の元老院議員と呼んでいる。この称号は長年元老院に所属した人物に使われる。

騎士身分説に対する反論

- アウレリウス=ウィクトルは「コンスル格」の元老院議員と呼んでいる。この称号は長年元老院に所属した人物に使われる。
- 273年のコンスルはカエキナ=タキトウスで、皇帝は正規でなく補充のコンスルとして既にコンスル職を経験していた。(124)

皇帝タキトウスとは？

- 軍隊経験を持つプレプス系の元老院議員と考えられる。

皇帝タキトウスとは？

- 軍隊経験を持つプレプス系の元老院議員と考えられる。
- 元老院議員の二極分化＝文官系と武官系

皇帝タキトウスとは？

- 軍隊経験を持つプレプス系の元老院議員と考えられる。
- 元老院議員の二極分化＝文官系と武官系
- プレプス系は軍団長や属州総督として平均15年軍務につく(124)

皇帝タキトウスとは？

- 軍隊経験を持つプレプス系の元老院議員と考えられる。
- 元老院議員の二極分化＝文官系と武官系
- プレプス系は軍団長や属州総督として平均15年軍務につく(124)
- 253年(ヴァレリアヌス帝)以降、元老院議員は軍事職から排除
- 軍事職の経験のある元老院議員は275年時点ではかなりの高齢に達していた

皇帝タキトウスとは？

- タキトウスは253年以前に軍事職を経験していたと推測(124)

軍人皇帝時代における元老院

- どうして軍人皇帝時代において元老院が皇帝選出に関与するように事態が生じたのか？
(125)

軍人皇帝時代における元老院

- どうして軍人皇帝時代において元老院が皇帝選出に関与するように事態が生じたのか？
(125)
- ロストフツェフとは違った意味(つまり元老院の農村化ではなく)で元老院の変質が原因
(125)

3世紀における元老院による 皇帝選出の事例

- 235年の事件: アレクサンデル・セウエルスの暗殺 > マクシミヌスの選出

3世紀における元老院による 皇帝選出の事例

- 235年の事件：アレクサンデル・セウエルスの暗殺＞マクシミヌスの選出
- 238年：元老院による皇帝選出

3世紀における元老院による 皇帝選出の事例

- 235年の事件：アレクサンデル・セウエルスの暗殺＞マクシミヌスの選出
- 238年：元老院による皇帝選出
- 244年：哲学者マルクス選出

3世紀における元老院による 皇帝選出の事例

- 235年の事件：アレクサンデル・セウエルスの暗殺＞マクシミヌスの選出
- 238年：元老院による皇帝選出
- 244年：哲学者マルクス選出
- 253年：ガリエヌスを皇帝に選出(125)

3世紀における元老院による 皇帝選出の事例

- 235年の事件：アレクサンデル・セウエルスの暗殺＞マクシミアスの選出
- 238年：元老院による皇帝選出
- 244年：哲学者マルクス選出
- 253年：ガリエヌスを皇帝に選出(125)
- 268年：ガリエヌス暗殺の報を受け、元老院はガリエヌスの子供たちを殺す(126)

3世紀における元老院による 皇帝選出の事例

- 268年：クラウディウス・ゴティクスは「元老院の意思」に基づいて即位したとするオロシウスの記述(126)

3世紀における元老院による 皇帝選出の事例

- 268年：クラウディウス・ゴティクスは「元老院の意思」に基づいて即位したとするオロシウスの記述(126)
- 271年：クラウディウス帝死去の後、元老院はその弟クィンティルスを選出(126)

3世紀における元老院による 皇帝選出の事例

- 268年：クラウディウス・ゴティクスは「元老院の意思」に基づいて即位したとするオロシウスの記述(126)
- 271年：クラウディウス帝死去の後、元老院はその弟クインティルスを選出(126)
- 275年：タキトゥスが帝権を与えられる

元老院は積極的に関与しているのは 何故か？

- 元老院の政治的影響力が著しく減退していたとする通説では説明できない

元老院は積極的に関与しているのは何故か？

- 元老院の政治的影響力が著しく減退していたとする通説では説明できない
- 元老院議員の中央政界からの後退は、皇帝が恒常的にローマに居ないということに起因する(126)

元老院は積極的に関与しているのは何故か？

- 元老院の政治的影響力が著しく減退していたとする通説では説明できない
- 元老院議員の中央政界からの後退は、皇帝が恒常的にローマに居ないということに起因する(126)
- 皇帝は外征に大半の時間を割かれる(126～127)

元老院は積極的に関与しているのは何故か？

- 元老院の政治的影響力が著しく減退していたとする通説では説明できない
- 元老院議員の中央政界からの後退は、皇帝が恒常的にローマに居ないということに起因する(126)
- 皇帝は外征に大半の時間を割かれる(126～127)

元老院の復権

- 皇帝の不在は同時に、在地有力者としての元老院議員の側面を際立たせることになる。皇帝に代わって、元老院議員がサーカスや様々な恩恵を施す。(127)

元老院の復権

- 皇帝の不在は同時に、在地有力者としての元老院議員の側面を際立たせることになる。皇帝に代わって、元老院議員がサーカスや様々な恩恵を施す。(127)
- 帝国内の新たな勢力として再編された(127)

結論

- 元老院の政治的影響力が軍隊を前に殺がれていったという従来の研究に誤りがあり、元老院議員の在地勢力者化という変質によって元老院は皇帝不在のうちに新たな力をつけ、タキトゥスを登極させた(127)